

パレスチナ子どものキャンペーンでは、昨年12月にガザの南部ラファで、種子バンク事業を始めました。0.25ドナム(250㎡)という小規模な農地を持つ女性たちを対象に、在来種の種子と貯水タンク、灌漑用のホース(一定間隔で穴が開いていて、水が少しずつ出る)などを支給し、同時に栽培や採種の研修を行っています。参加者には一人男性が混じっていますが、この方の亡くなった奥さんは自分で種子の栽培を始め、種子バンク事業のきっかけを作った人です。遺志を継いで参加しています。

10月に、種子バンク事業の参加者、参加者たちの属する地元の草の根NGO(RWDS)、そして技術指導などを進めてきた「パレスチナ農業開発協会(PARC)」、それに当会の現地スタッフと日本人スタッフが一堂に会して、振り返りの会議を開きました。その様子を、当会現地スタッフに報告してもらいました。

種子バンク

食料の確保と翌年の生産が可能に



参加者全員の話し合い

種子バンク事業では10月までに2回の収穫があり、60kg近い種子が生産されています。その一部は、来年の同じ事業と現在計画している農業研修事業に使います。またイタリアのNGOが購入して、新しく始める「家庭菜園」事業にも使われることになっています。うわさを聞いているんな人たちがたずねて来るそうで、地元の関心も高まっています。

振り返りの会では、参加者が自由に意見を出し合って、プロジェクトの長所(S)、短所(W)、将来の発展の可能性(O)、阻害要因(T)それぞれを検討する「SWOT」と呼ばれる分析手法を使いました。私は今年の春から種子バンク事業にかかわり、PARCのスタッフや参加しているラファの人たちとも顔なじみなので、この話し合いの進行役になりました。参加者の発言を中心にその様子をお伝えします。

夏に5番目の子どもを出産したばかりの**Aさん**は、妊娠中も夫の手を借りながら畑作業をしていました。「赤ん坊が生まれてちょっと忙しいけれど、種子バンクで私の農業の技術はありました。これからは一人でできるという自信もつきました。私が一番長所だと思うのは、みんなで経験の交換

をし、相互的に繋がったことだと思います。この事務所に良く集まって、いろいろと意見交換して、教えあっています。」

収穫量が増えた

「プロジェクトはカンフル剤になりました。」**Bさん**(男性)はいいいます。「4年前から種子作りをしてきたけれど、研修で専門的な話を聞けて収量が大きく増えたし、計画的で組織的な種子作りが出来るようになった。ますます強化していくべきだよ。農民の能力向上にすごく役立っている。オクラの収穫量がとても増えて、今朝も3kgの種を取ってきたところだよ。とうもろこしの栽培についても新しい技術を学んだ。若い実のうちに紙でカバーすると種子が非常に良い質になるんだよ。」

Cさんは、「私が学んだのは、化学肥料を使うのではなく有機コンポスト作りなどの安全な農業技術です。学んだ後、私は自分で作りました。以前は化学肥料を多く使っていましたが、いまは、有機の代替物を中心にしています。種子の保存にも保存料を使わずにできないかと試しています」といいます。離婚して、娘や息子の家族と一緒に大勢で暮らしているCさんは物静かなお母さんですが、技術の習得にはことのほか熱心で、いつも専門家、事業

に関わるNGOの人たちにいろいろと質問をしています。その一方で、「私はいまでも化学肥料を使っているわ、その方が安心だから」という声もありました。

Dさんも発言しました。「うちは市場から遠く離れた場所なので、自分で野菜が取れるのは本当に助かりました。うちは大家族なので、みなに食べさせるのは大変なのです。お金の面でも助かりました。野菜を毎週70シェケル(約2000円)ほど買っていたのですが、それを買わずに済みました。種子を採ったのは初めてだったので、とてもよい経験になりました。ただ、野菜ができたときに最初の2回の収穫物を食べてしまって、3回目だけ種子にしたので生産量は多くはありませんが、満足しています。今年の冬は種子を買わずに自分で作った種子を使えます。それから初めてハーブを植えました。これからが楽しみです。」

彼女の家族は結婚した息子とその家族も含めて大家族です。夫はイスラエルの農場に出稼ぎしていたので、技術や知識もありますが、この一家には大きな土地がないので外で働いています。この家では若い息子たちが母親を助けて、掃除や料理もしていて、とても好ましい雰囲気でした。

食べ物が確保できた喜び

Eさん「私のうちも野菜をほとんど食べてしまって、種子の量はあまり多くありません。特にカブはたくさんできたのですが、みんな生活に困っているのを知っているから、隣近所に配ってしまいました。お互いに助け合っているのです。それでも今年は種子を買わずに済んで、できた種をまき始めています。良い具合に芽が出てきました。今年は計画的に種子を採れるようにしたいと思います。」Eさんは口数が少ない女性で、やはり子どもや孫と同居しています。

ガザの女性という、黒いスカーフで顔を隠し家の中に閉じこもっているという印象があるかもしれませんが、みな熱心に農業をし、活発に意見を言います。種子バンクのうわさは「**農村女性による開発の会(RWDS)**」の名前とともに近隣に広がっています。「在来種の種子バンク」という看板がRWDSの建物だけでなく、交通量の多い交差点にも掲げられました。

「これまでも個人的には自家採種をしているメンバーはいたのですが、いまはもっと専門的にそして組織的にプロジェクトとして成立しました。団体として在来種の自家採種に取り組んでいるRWDSのことはとても話題になっています。新しく素晴らしい考えだからです。他にはどんなことをしているの?という関心も集まってきました。メンバーの女性たちも新しい農業技術を獲得し、自立しているという自信を持っていますし、家族との関係もとても良いみたいです。団体としてもとても誇りを感じます。」とRWDSの世話人の**Fさん**が話してくれました。

Fさんは、Bさんの亡くなった奥さんと一緒にこの団体を立ち上げた一人です。二人は何かの会で隣同士になった縁でいろいろと語り合い、「農村の女性こそグループを作らなくちゃ」と共鳴して団体を始めて約10年になります。「ラファにFさんあり」といわれるくらい、NGOのなかでは高い評価を受けている人です。

深刻な水不足

事業の困難点として出されたのは、水不足と灌漑用のビニールホースの品質でした。「夏場はまったく種子ができなかった。今年はことのほか暑くて、しかも給水タンクの水が畑の隅々に届かなかったのもその理由だと思う。2時間くらい付き切りにならないと駄目なので大変でした。また、大きな農具がなかったのも、畑を耕すのに苦労しました。あと、土が弱っているのですが、今回はコンポストを作る余裕がなかったので、化学肥料が必要でした。」と言ったのは**Gさん**でした。

ガザは普段でも水不足で、生活用水も足りません。Bさんのように、井戸があつて、雨水を貯める池を作っている、そして水をまくためのポンプを持っている人の場合は良いのですが、何もないGさんの場合は一苦労だったのです。「封鎖で質の良いイスラエル製のビニールホースが入ってこなかった昨年は、質の劣るエジプト製のものや、もっと質の悪い地元の再生ビニールホースしか入手できず、目詰まりが起きてしまったのです。」とPARCの事業責任者のHさん(女性)が説明してくれました。「いまはもう少し良いものが入手できると思います」。封鎖によってガザの農業は様々な面から影響を受けています。

Gさんは6人の子どもがいて、その世話にいつも大変そうです。しかし農業にも熱心で、非常によく学んでいました。「これまでも野菜は少し作っていましたが、今年はずっと良いできました。栽培にも収穫にもずっと注意できたからだだと思います。それに、自分で種子をとった、たまねぎと、カブ、ルッコラはもう種まきをして、順調に育っています。農業を知って欲しいから、子どもたちにもなるべく手伝わせています。」



地球温暖化への関心

Iさんは、農作業の経験がたくさんあって、種子の生産量も女性の中では一番多かった人です。成人した娘と息子がいます。私たちが突然訪問してもいつも陽気に迎えてくれ、冗談をよく言います。この日は息子さんが怪我をしたというので欠席して、娘さんが代わりに来ていました。多くの家庭で娘や嫁たちが母親世代と一緒に作業をしているのです。

「水の問題はうちでも深刻でしたが、母は種子のできに満足しています。うちでは、予定よりも広い土地を使いましたが、皆さんも広く栽培するともっと生産量が上がり、満足度が上がると思います。乾燥については、母は乾燥機を使うのは不安だといって天日干しをしていました。種子の保存料も使っていません。種子を収穫した後で、より分けるための作業は手作業なのでそれが大変です。ちょうど良い手袋や目のサイズの違うフルイがなかなか入手できません。しかたなく素手でやるので、手がボロボロになってしまいます。」

私たちは手袋とフルイについて、質の良いものを探して提供することを約束しました。乾燥機(太陽熱と自然風を使って乾燥をする装置)については、地元の専門家たちはこれを強く推奨していますが、農家の反応はまだいまひとつで、今後も試行錯誤を重ねようという結論が出ました。

ラファではいま2日おきに断水がおきている状態です。水不足は深刻で、より効率的な水の使い方をみんなが考えているところです。私たちも水と土壌の問題を真剣に検討する必要を痛感しています。この夏はガザもいままでもなく暑く、その話題がひとしきり出ました。女性の一人が「地球温暖化のせいね」といったのに、みながうなずいていたのが印象的でした。ガザでも農業に携わっている人たちは環境問題を身近に感じています。

種子バンクの事業は来年も続けたいと考えています。この事業は助成金や補助金などの資金に頼っておらず、市民の皆さまからの支援金で成り立っています。事業が継続できるよう、ご協力をお願いいたします。